Ⅱ. 人口と都市構造

１．人口

２０２１年の目標人口を、１５万人とします。

人口は近年微増の状況で、その構成は、年々高齢者人口が増加するとともに、年少者人口が減少しており、少子高齢社会の人口構造に確実に傾斜しています。さらに、人口急増期に転入してきた世代が今後一気に高齢化率を押し上げるという特徴も持っています。また、転出入が激しい子育て世代の定住化が課題になっています。

目標人口１５万人は、こうした動向を見据えながらも、子育て世代の定住環境を向上させるさまざまな施策の展開をはじめ、多世代が住み続けられるまちづくりを積極的にすすめることを踏まえて設定したものです。

２．都市構造

１）都市構造の形成

我孫子の自然構造の特徴は、手賀沼・利根川・古利根沼という広大な内水面とそれに囲まれた台地上の市街地、そしてその中間に農地や斜面林などの二次自然があることです。

この特徴をいかし、歴史や地理的特性、市街地などの形成過程を踏まえて、東西に細長いまちをひとつのまとまりのある都市として形成します。そして、この都市構造を自然環境ゾーン、地区と拠点、交通軸という観点から明らかにします。

（１）自然環境ゾーンの形成

○自然環境ゾーンの形成

農地、斜面林、水辺などは、それぞれの要素が関連しあい、全体として多様な生物が生息できる自然環境をつくりだしています。また、私たちの豊かな生活を支え、地域への誇りと愛着をはぐくむとともに、自然の大切さを学ぶための貴重な場でもあります。

そのため、地形や水系などの環境条件が異なる６つの区域を自然環境ゾーンとして設定し、その特性をいかしながら、それぞれを一体的に保全・活用します。

○自然環境ゾーンの核づくりと自然環境ゾーンをつなぐ軸の形成

自然環境ゾーンには、自然を感じ、くらしとのかかわりを学び、さまざまな交流が繰り広げられるような核づくりをすすめます。

さらに、公園・緑地や河川・水路、街路樹などをいかしながら、各自然環境ゾーンを相互にネットワークし、連続性のある自然の骨格づくりをすすめます。

（２）地区のまとまりと拠点の形成

○地区の形成

市街地は、駅を中心とした５つのまとまりを持った地区で形成されています。これらの地区では、それぞれが持つ自然や歴史・文化などの特色をいかしながら、身近な生活を支える安全で快適な空間づくりをすすめます。また、我孫子、天王台、湖北、新木、布佐の５つの駅周辺を地区拠点と位置づけ、拠点機能の整備をすすめます。

○中心拠点の形成

我孫子駅周辺は、市全体を対象とするさまざまなネットワークの拠点としての機能整備を行います。また、手賀沼公園周辺と一体化した魅力ある空間づくりをすすめ、それぞれの特性をいかしながら、市のシンボルとなる中心拠点とします。

（３）交通軸の形成

○地区間を連結する都市軸の形成

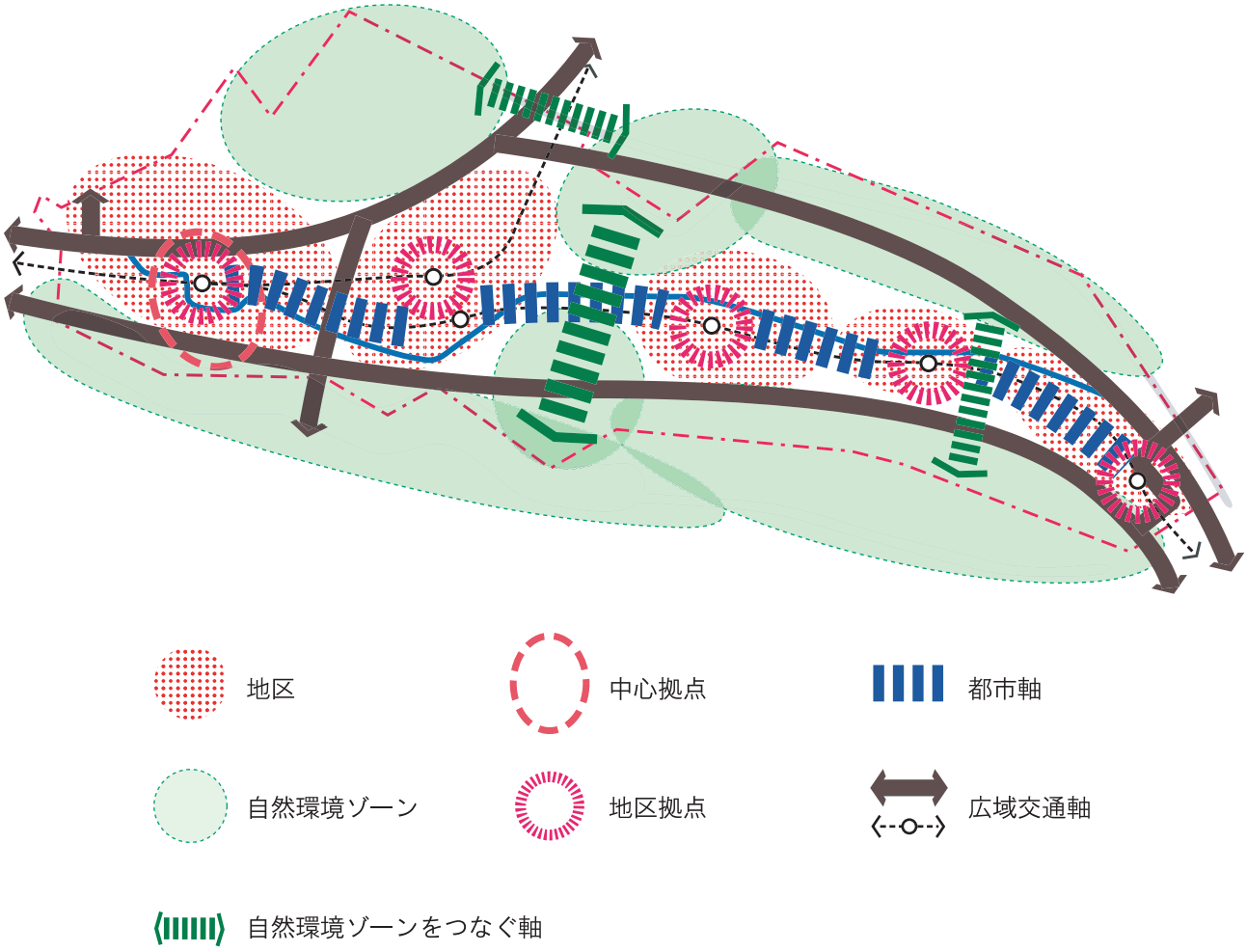
５つの地区を連結する都市軸として成田街道とＪＲ成田線を位置づけます。市内各地区の連絡を強化するとともに、だれもが快適に移動できる環境を確保し、沿道や駅周辺での魅力的な空間づくりをすすめます。

○広域交通軸の形成

広域との交通を円滑にするための広域交通軸として広域的な幹線道路と、ＪＲ常磐線、ＪＲ成田線を位置づけます。広域的な幹線道路網の整備にあたっては、十分に沿道環境を確保するとともに、安全性を確保しながらすすめます。また、鉄道の利便性の向上に努めます。

さらに、新たな広域交通軸の形成にあたっては、市民の生活や自然環境に十分配慮するとともに、まちの発展にいかします。

■将来都市構造図



2）土地利用の基本方針

市街地は、適正な土地利用の誘導により、快適でくらしやすいまちを形成します。

市街地を取り巻く、手賀沼や古利根沼などの水辺、農用地区域に広がる集団的な優良農地、身近で緑豊かな斜面林など、重要な自然環境がある区域は、積極的に保全します。その他の農地や緑地などの自然的土地利用がなされている区域については、自然環境を最大限保全することを基本とし、新たな都市の発展を担う都市的土地利用をはかる場合には、自然環境の保全・創出に努めます。

土地利用は、この基本方針に基づき、総合的・計画的にすすめます。